石神中学校だより13号

発行日：令和４年１０月１７日

2022重点目標「自ら学び，共に高め合いながら夢の実現のために努力する生徒」

文責：校長　佐藤恭司

令和4年度相馬地方読書感想文コンクール特選

相馬地方読書感想文コンクールの審査が行われ、本校から特選２点、入選３点の作品が入賞しました。学校だよりでは、特選に選ばれた２作品を紹介します。今号は、西内心春さんです。

「海を見た日」を読んで

二年　西内　心春

子どもの権利とは何だろう。この本を読んで、まず初めに思ったことである。私は、子どもたちが毎日幸せに過ごせることだと思った。では、「幸せ」の定義とは何なのか。私が当たり前だと思っている衣食住の確保は、誰かにとっては当たり前ではない。世界のどこかでは、戦争によって自分の命を守るために、息をひそめている子どもたちもいるのだ。日本に生まれ、当たり前のように家族と一緒に暮らし、食事を摂って学校に行く。テレビで戦争のニュースを見ても「大変だね」と他人事だ。しかし、本当に他人事でいいのだろうか。考えてみると、私がこの国に生まれたこと、この国が戦争をしていないこと、衣食住に困らずに生活できること、そのどれもが偶然のことなのだ。

ナヴェイア、ヴィグ、マーラ、クエンティンの四人の子どもたちは、ミセス・Kの元で里子として暮らしている。一番年上のナヴェイアは、忙しいミセス・Kに代わって家事を行うなど、一番面倒見のよいお姉さんに見える。だが、本当は自分の将来の計画を実現させるため、家を追い出されないように里子の弟妹を世話していたのだ。同じ中学二年生であるナヴェイアの計画性に、私は驚いた。私には将来やりたいことすら決まっていない。それなのに、ナヴェイアは自立するために、いかにお金をかけずに医者になれるかを考え、実現のために日々努力している。ナヴェイアの弟にあたるヴィクは、父親が違法移民の一斉摘発で強制送還された。しかし、そのことを知らないヴィクは、エルサルバドルの独房に父親が監禁されていると信じ、助け出すための訓練を続けていた。自分をスパイだと妄想しながらヴィクは父親を待っているが、何事も臆することなく行動に移す勇敢さに私は憧れる部分があった。　妹分のマーラは幼くて英語が話せないので、スペイン語で気持ちを整理している。そして、新しくミセス・Kの家の里子になったクエンティン。彼は、アスペルガー症候群である。しかし、母親から教えられたことをきちんと覚えていて、それを忠実に守る姿に、いかに母親を愛し大切に思っていたかを感じ取ることができた。

最後に、この里子たちの母親でなければならないミセス・K。彼女は、夫に先立たれてしまい、その悲しみから抜け出せずにいた。里子たちの世話や家事はナヴェイア任せ。しかし、私にも少しミセス・Kの気持ちが分かる気がした。私が大切に思っている人が亡くなってしまった時の悲しみは今、思い出しても胸の辺りが締め付けられるような感覚がある。きっとミセス・Kもこのような感覚の中で日々の生活を送っていたのだろう。

里子四人が、クエンティンの母親に会うためにトーランスの病院まで旅に出た。旅の中で、様々な事を四人で経験することで、これまで知らなかった相手の側面を知ることができ、四人の仲が強い絆で固まっていくのを読みながら感じた。初めての観覧車や、そこから見えるはるか先の水平線。これまで一緒に暮らしていても相手を知ろうとしなかった四人が、同じ体験を経て少しずつ歩み寄ろうとしているのが分かった。私にも、姉と妹が一人ずついるが、血がつながってはいても、趣味や性格は違う。しかし、これまで様々な事も共感したり、経験を共にすることで相手が今、何を考えているかを理解することができるようになった。血のつながりは関係ない。相手を知りたいという気持ちがあれば、心と心がつながることができるのだと思う。

「親ガチャ」という言葉がある。親は自分では選べない、どういう境遇に生まれるかは運まかせという意味

合いだ。親からの虐待、ネグレクト、経済格差など、毎日のニュースで聞こえてくるが、それらを断ち切るにはどうしたら良いのだろう。親ガチャ失敗と受け身で嘆いても、事態は変わらない。里子の四人は、決して親ガチャ失敗などとは思っていないだろう。今は、目の前にいない親であっても、一緒に過ごした日々を宝物のように大切に思っているに違いないからだ。しかし、だからといって、彼らには親を頼るという気持ちはない。「だれも助けてくれないなら、自分で自分を助けるしかない」とナヴェイアが言っていたように、自分の力でこれからの人生を生き抜いていくしかないからだ。

この本を読み、私はアメリカの里親制度の問題点を知り、子どもの権利についても考えることができた。「幸せ」とは、衣食住も含め、安心して生活できる環境と自分を愛し慈しんでくれる存在が身近にいることだと思う。これが全ての子どもたちにとって最低限の子どもの権利ではないかと私は考える。この権利を全ての子どもたちが手に入れられる世界にしていくため、私たちに何ができるのだろうか。全ての子どもたちが幸せに生きるためのこの権利について、私はしっかりと考えていこうと思う。

♪原町区・小高区合同小中学校音楽祭出場

１０月１４日(金)南相馬市民文化会館「ゆめはっと」を会場に原町区・小高区合同小中学校音楽祭が開催されました。今年度は、原町区と小高区の小中学校１３校が出場し、合唱や合奏、吹奏楽などを発表しました。会場の歌や演奏は、参加した多くの児童や生徒の心に響きわたりました。他校の演奏が、さらに自分たちの表現力を高める“もと”になったことでしょう。本校吹奏楽部のチームワークと演奏技術の高さが見られた発表でした。今月末の文化祭の発表も大いに期待されるところです。

指導力向上のための「学校訪問」開催

１０月１３日（木）に市教育委員会、相双教育事務所の指導主事の先生方を迎え、学校訪問が行われました。先生方の授業力・指導力向上を目的に、全先生方の授業を公開しました。日頃、先生方は、校内研修や中教研、市教研、相特研、個別研修など、多岐にわたる授業研修を積んでいます。生徒がわかる授業のために「主体的な学び・対話的な学び・深い学び」の実践を取り入れた授業が求められています。今回の学校訪問を通して、さらなる授業力向上のために研修を深めていきたいと思います。

～ねがい～　**「縁の下の力持ち」**　集団生活の中では目立たないですが、人の気付かないところで、いろいろ考えたり、人のために力を尽くしたり、努力をしたりする人がいます。縁の下にある土台は外から見えませんが、しっかりと家を支えています。このことから、人知れず努力をしている人、人のために尽くしている人を「縁の下の力持ち」と言います。本校にも多くの「縁の下の力持ち」が活躍をしています。